

## 商務印書館の映画事業に関する研究

——陳春生の経歴を視座として

番 昭

**要旨:** 中国の映画事業を言えば、初めて登場した映画は『定軍山』である。そして、1920年に上映した『閻瑞生』は本格的劇映画として認められている。しかし、本当の「映画」については映画事業の初期では「活動写真」、「活動影事」などと呼ばれていた。最初の写真から徐々に発展し、映画までどのように成長してきたのかを映画事業の基礎として大事に認識すべきである。さて、商務印書館は中国の出版会社における歴史長い機構である。出版大手会社である商務印書館は当時、中国民族資本の初めとして映画事情にも関わっていた。陳春生は商務印書館での経歴はちょうど当館の映画事業を全体に経験したため、本稿は『張元濟日記』で陳春生に関する記述を中心に分析し、彼の経歴を視座として、中国の映画事業において「映画」と命じられるまでの時期は具体的に何と呼ぶか、どんな発展があるか、そして陳春生が商務印書館の映画事業に対する貢献を考察する。

**キーワード:** 中国映画、商務印書館、陳春生、『張元濟日記』

### はじめに

中国の映画事業と言えば、初めて中国で登場した映画は『定軍山』である。そして、1920年に上映された『閻瑞生』は本格的劇映画として認められている<sup>1</sup>。しかし、本当の「映画」については映画事業の初期では「活動写真」、「活動影事」などと呼ばれていたようである。最初の写真から徐々に発展し、映画までどのように成長してきたのかを映画事業の基礎として重視すべきである。陳春生は商務印書館での職歴はちょうど当館の映画事業を全般的に経験したため、本稿は『張元濟日記』で陳春生に関する記述を中心に、中国の映画事業において「映画」と命名されるまでの時期は具体的に何と呼んだのか、どんな発展があったか、そして当時の商務印書館の映画事業について考察する。

## 第一章 中国初期の映画事業

### 第一節 商務印書館について

商務印書館は中国の出版会社における歴史の長い機構である。1897年に上海で成立した。商務印書館の「大事記」<sup>2</sup>により、創立した時当館は以下図1のように現れている。そして、夏瑞芳(1872-

<sup>1</sup> 程季華『中国映画史』平凡社、1987年、23-24頁。

<sup>2</sup> 「大事記」商務印書館 北京 ホームページ:

1914)<sup>3</sup>、鮑咸恩(1861—1910)<sup>4</sup>、鮑咸昌(1864—1929)<sup>5</sup>と高鳳池(1864—1950)<sup>6</sup>などは創立者であり、1898年に商務印書館の第一部の学術書(専門書)である『馬氏文通』<sup>7</sup>を出版した。初期には商業簿記を主に取り扱っていたので「商務」と名前がついている。



図1

そして、商務印書館が創立してから上海での沿革は大凡以下のように述べられている。

1902年 正式に印刷所を開設。編訳所および発行所で蔡元培(後に張元濟)を所長とする。張元濟、高鳳岐、夏曾佑が前後して加入する。

1903年 中国で第一部となる小学校の教科書「最新教科書」を出版し、以後小中高の教科書が全国で用いられる。同年嚴復訳『群学肄言』、林紘等訳『伊索寓言』(イソップ寓話)を出版する。両者の訳著は後代に大きな影響を及ぼす。

1904年 『東方雑誌』を創刊する。

1907年 租界によって閘北華界宝山路の80畝の新事務所に移る。

1909年 『教育雑誌』を創刊する。

1910年 『小説月報』を創刊する。

1911年 『少年雑誌』を創刊する。

1914年 創業者で総経理であった夏瑞芳が死去。同年香港に支社を設置。『学生雑誌』を創刊する。

<sup>3</sup> 夏瑞芳(1872—1914)、字は「粹方」であり、江苏省青浦县の人である。

<sup>4</sup> 鮑咸恩(1861—1910)、浙江省鄞县人である。

<sup>5</sup> 鮑咸昌(1864—1929)、字は「仲言」であり、浙江省鄞县人である。

<sup>6</sup> 高鳳池(1864—1950)、字は「翰卿」であり、江蘇省上海县の人である。

<sup>7</sup> 馬建忠『馬氏文通』全10巻からなり、初版は上海商務印書館より、1898年に「正名」、「実字」編である6巻までが発行され、翌1899年に「虚字」、「句読」編からなる残り4巻が発行された。

- 1915年 新式の辞書『辞源』の第一部を出版する。
- 1916年 シンガポールに支社を設置する。
- 1921年 胡適の推薦で王雲五が任職し、1930年に総経理をつとめる。
- 1924年 東方図書館を設立する。
- 1932年 第一次上海事変（一二八事変）がおきる。二日目に日本の空襲で商務印書館、東方図書館が焼かれる。
- 1954年 上海から北京に移る。西欧の学術の名著を重ねて出版する。（累計十集四百余种出版されている「漢訳世界学術名著叢書」も北京商務印書館が版元である。）

出版業界の大手会社である商務印書館は当時、中国民族資本の初めとして映画事業にも関わっていた。もちろん、映画事業は主なビジネスではないが、当時では映画の発展における不可欠な存在である。上海での商務印書館に関する業務は如何にどのように映画事業を始めたかを以下の節で詳しく分析する。

## 第二節 中国初期映画事業における商務印書館時期

中国映画に関する研究は少なくない。特に、中国映画と言えば、程季華(1987)『中国映画史』<sup>8</sup>が主に研究分野で参考になる資料である。そして、映画史に関する最近中国電影博物館と北京電影學院が出版した王海洲(2017)『中国電影 110年:1905—2015』<sup>9</sup>、黄德泉(2012)『中国早期電影史事考證』<sup>10</sup>などが列挙される。以上の先行研究では、中国映画の起点は上海であることと、最初の劇映画は『閻瑞生』であると述べられている。また、『閻瑞生』の製作については、賃借料払い込み方式により、1921年7月に最初の上映を行った。商務印書館影片部に撮影、現像、プリントを依頼した設備を使い、中国の最初の劇映画が誕生されたことがわかった。しかし、先行研究では商務印書館の映画事業における「活動影片部」の成立については統一されていないため、本稿は中国早期映画の商務印書館時期に関する映画事業を明らかにしようと考えられている。

商務印書館は出版を業としていたが、映画事業を兼業し始めたのは1917年頃であった。しかし、当館の映画事業に関する情報は様々である。例えば、「活動影片部」の成立時期については以下のように指摘されている。

该馆 1917 年在印刷所照相部附设活动影戏部，继改为电影部，<sup>11</sup>

1926 年初改组为国光影片公司，

1928 年初停办。

<sup>8</sup> 同注1。

<sup>9</sup> 王海洲(主編)中国電影博物館 北京電影學院(編)『中国電影 110年:1905—2015』中国電影出版社、2017年。

<sup>10</sup> 黄德泉『中国早期電影史事考證』中国電影出版社、2012年。

<sup>11</sup> 本文での下線標記はデータ分析のため、筆者が付けたマークである。以下同様。

—楊小仲「億商務印書館電影部」

1918 年、鮑慶甲成立「活動影戲部」、請陳春生任該部主任。

1920 年董事會通過該機構簡章，正式設立並將活動影戲部改名為商務影戲部。

—王海洲『中国電影 110 年』

1917 年映画事業を兼業し始めた。

1918 年以降、活動影戲部は広範な映画活動を開始した。

1919 年末、活動影戲部を商務印書館影片部に改名した。

—程季華『中国映画史』

1918 年、活動影戲部が設けられた。

1919 年に名を商務印書館影片部と変え、翌年(1920 年)グラスステージを建設、映画の撮影代行も行うようになる。

—佐藤忠男 刈間文俊『上海キネマポート』

以上のように、商務印書館の映画事業はどのような仕組みか或いは成立の時期などに関連する研究は統一されていなかったため、本稿は当時の資料(史料における直接の情報)に基づき、『張元濟日記』で陳春生に関する記述を中心に、その状況を再現したい。陳春生の経歴を視座として具体的な資料を分析して、中国早期映画事業における商務印書館時期のあり方を明らかにする。

## 第二章 『張元濟日記』と陳春生

### 第一節 張元濟と『張元濟日記』

張元濟は張菊生とも呼ばれている。日清戦争後、変法運動に積極的に関わり、陶然亭集會を組織した。1897 年、北京に溪学堂を創設した。そして、戊戌の政変後に免職され、上海の南洋公学(現在の上海交通大学)の訳書院の院長となった。1901 年、商務印書館の出版活動に参加するようになった。1903 年から商務に参入し、編訳所の所長を担った。1924 年にマネージャーを辞任し、職務を管理職に変えた。そして、張元濟は長期にわたって商務印書館を主宰し、後には理事長となった。さらに、近代維新運動と文化史において非常に名高い人物である<sup>12</sup>。1949 年、第一期全国人民代表大会の代表に選出された。

『張元濟日記』は張元濟が 1912 年から 1926 年までの間に執筆した商務印書館の「館事日記」<sup>13</sup>である。当時張元濟は商務印書館の編訳所所長(1918 年まで)を担って、マネージャー(1924 年まで)も担当した時期である。この日記は張元濟が逝去した後、陳敬通<sup>14</sup>が整理した物である。「文化大革命」で整

<sup>12</sup> 張元濟『張元濟日記』「出版説明」商務印書館編輯部、1981 年 9 月。

<sup>13</sup> 当時の商務印書館で発生した事情を記録すること。庶務、用人、会社、人事など様々な内容がある。

<sup>14</sup> 陳敬第(1876—1966)又、陳叔通と呼ばれている。中国の政治活動家であり、浙江省杭州の人であり。そして、商務印書館の理事長であった。

理の仕事はうまく進められなかったため、整理の仕事は1981年に商務印書館で完成した。整理に関する事情は『張元濟日記』(上冊)に以下のように記述されている。

為保存有關我館文獻，現把日記整理完畢，徵得張先生家屬同意，全文印行，以紀念建館八十五週年。

張元濟の家族の同意を貰った上で、日記を全頁出版することになった。この『張元濟日記』の出版は商務印書館が創立八十五周年を記念するためである。そして、原日記の内容は、合計三十五冊があり、毎冊に六十頁がある。第一冊は1ページに一日の内容が記入され、第二冊からは2ページに1日の内容が記入されている。しかし、最後の何冊かには空白ページがたくさんある。日記の原稿は表で欄ごとに分けられている。具体的には図2のようなものである。

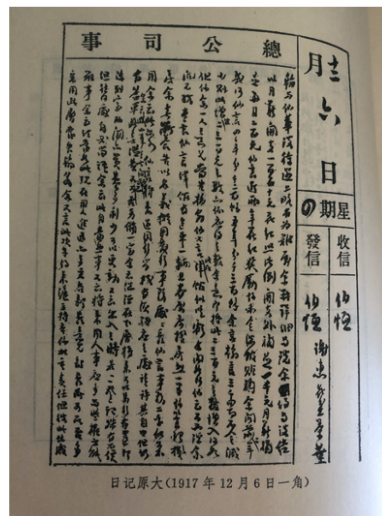


図2

## 第二節 陳春生に関する日記の内容

『張元濟日記』に商務印書館の庶務などが収録されたため、本稿は日記に記入されている内容を分析し、陳春生に関する記述を細かく検索してみたら、陳春生に関する全ての情報を以下表1のようにまとめた。

表1<sup>15</sup>

『張元濟日記』	時間	分類	内容
第七本 第216頁	四月卅日 星期一 1917/04/30	应酬	(前略) 訪陳春生未遇。亦昨午事。
第七本 第220頁	五月九日 星期三 1917/05/09	公司	(前略) 陳春生來信、為合并。經余與面談、似已明了。 張叔良亦有意見書、為推廣事。
第十二本 第382頁	三月廿一日 二月初九日 1918/03/21	發行 应酬	陳春生談、教員代學生買書、無好處、甚不利。故教員多反對用本版。用書之權、全在教員、故必須令教從中有益、方能推廣。余謂、只能將零售者抬高折扣、覓買者給予較優之折扣。

<sup>15</sup> 表にまとめた分類と情報は全て日記の原稿に沿っている。

			晚约股东史悠凤、 <u>陈春生</u> 谦夫、吴锡赓、李恒春、奚松龄在一家春晚饭。翰亦到。午与拔翁约(后略)
第十七本 第 569 頁	四月十七日 星期 四 1919/04/17	公司	致陳春生信、谓明日系通问报广告期满、请暂停登、另定办法。
第十九本 第 633 頁	八月二十一日 星 期四 1919/08/21	用人	告翰翁、拟调莲溪任存货科仪器股。又拟延用 <u>王春生</u> 。翰谓、渠亦有来意、但恐通问报难得脱身、教会西人亦未必肯允。然如实在必欲罗致、亦可与商。薪水现在约不足百元云。俟王仙华病愈、拖伊转达。
第十九本 第 651 頁	九月十九日 星期 五 1919/09/19	用人	本日会议、仙华提及、拟延张廷荣任广告。薪水不能过高、另给回佣。 余告仙华、前商准翰翁、拟延陈春生、亦乞转询。(后略)
第十九本 第 653 頁	九月二十三日 星 期二 1919/09/23	用人	张廷荣不允来馆。 陈春生可来、拟先约来试办半月、月薪约六十七元。 函丁斐章、骆君暂从缓。因仙华有所闻、其人不甚纯洁也。
第十九本 第 669 頁	十月二十七日 星 期一 1919/10/27	用人	张云博来信、允令其子来馆。 <u>与鲍先生商定陈春生坐位</u> 。鲍云、在照相部。余云、业务科亦可兼设、以便与总务处接商。鲍云、拟派郁厚培赴美学习。余问英语能否运用。鲍云略可使用。鲍意当遣二人。余意似太多、恐不相宜。 仙华告知、谢福生半日五十元恐不敷、劝其全日来馆、并属问卮。
第十九本 第 670 頁	十月二十八日 星 期二 1919/10/28	用人	拟延西人任进货科事。余在会议席上提及。翰不答。 翰拟定廷荣办广告事、月支三百五十元、另包定回佣六百元。广告费三万元以上、提百分之十。余意每万加一厘。后细算为数已不少、故未加、仍从翰议。

			商定陈春生半日办事、月薪六十元。
第二十本 第 677 頁	十一月十八日 星期二 1919/11/18	文具	翰翁交陈春生活动写真说明一册。
第二十本 第 677 頁	十一月十九日 星期三 1919/11/19	公司	陈春生来信、言购南京路地段种种不妥。
第二十本 第 698 頁	元月初二日 星期五 1920/01/02	仪器文具	制造影片事。余函知陈春生、可与美国某公司接洽。系郭生所介绍。 (1919/12/18 应酬:朱兆莘介绍美国远东影画公司 J.O.Upham 住旧金山 510Market St. 来见。 当招庆甲来陪、导参观)
第二十一本 第 717 頁	三月一日 旧历正月十一日 星期一 1920/03/01	应酬	昨午约丁斐章、陈春生、王连溪、李拔可、盛同孙便酌。仙华、郁厚培、郭洪生、翰卿、咸昌、梦旦、梅生未到。
第二十九本 第 805 頁	十月十五日 旧历九月十五 星期五 1921/10/15	应酬	陈春生、蒋竹庄、许博明来。

以上表 1 のように、陳春生に関する情報は少なくない。まず、この中で特に注目すべきことは、「第十二本 第 382 頁」1918 年 3 月 21 日に「発行」の内容である。

陳春生談、教员代学生买书、无好处、甚不利。故教员多反对用本版。用书之权、全在教员、故必须令教从中有益、方能推广。余谓、只能将零售者抬高折扣、趸买者给予较优之折扣。

この内容から見ると、陳春生は商務の教科書の販売事情についての問題点を分析し、さらに助言をしたが、張元済はそれを参考にした上で解決の方法を提供した。陳春生に関する情報は 1917 年 4 月 30 日「應酬」欄の「(前略) 访陈春生未遇。亦昨午事。」(陳春生の所に参ったが、会えなかった。)は初出である。これらの情報を見て、陳春生は商務印書館との関係について検討すべきではないだろうかと認識されている。さらに、1918 年 3 月 21 日にもう一つ「應酬」欄の記述があった。記述により、陳春生は商務印書館の株主であることがわかった。日記の内容は以下のようである：

晚约股东史悠凤、陈春生谦夫、吴锡赓、李恒春、奚松龄在一家春晚饭。翰亦到。午与拔翁约  
(后略)

この内容から見れば、陳春生は当時、まだ商務の業務関係の仕事をしていなかったが、すでに当館の株主である。この情報は陳春生がその後なぜ商務の映画事業に誘われたかという理由を軽く想像させうるだろう。そして、「陳春生謙夫」との記述があるが、これは陳春生のことを示しているかを検討したい。なぜかと言うと、日記の中で人名を記入する時、結構本名や別称などが多いため、資料分析する時にできるだけコンプリートな内容に整理して、それに基づき検討したい。そのために、陳春生の「字」が「謙夫」であろうか、「陳謙夫」と言う人は確実に存在したかを検討する。まず、日記を確認すると、「陳謙夫」が第 422 頁「公司」欄の「余因詢陳謙夫之事。」と第 553 頁「編訳」欄の「陳謙夫經手漢英商業尺牘、以三百元購入。」のように何回も記入されていて、そして筆者の調査によれば、「陳謙夫」は商務印書館における「歴史人物名リスト」にも出てきたため、陳春生とは別人であると認識される。

以上の情報を検討した上で陳春生はどのように商務の映画事業に関与されたかを分析する。上記表 1 によると、最初に陳春生を業務に参加させるという考えは 1919 年 8 月 21 日の「用人」欄に表れた。

又擬延用王春生。翰謂、渠亦有來意、但恐通問報難得脫身、教會西人亦未必肯允。然如實在必欲羅致、亦可與商。薪水現在約不足百元云。俟王仙華病愈、拖伊轉達。

この内容については、まずここで記述された「王春生」を確認すべきである。後の記事を見れば、陳春生は通問報の業務で忙しく、西欧人の同意を受けにくかった。そして、通問報の中国人編集長は陳春生が担当していたため、この「王春生」は「陳春生」の誤記入であると判断した。また、一ヶ月後の 1919 年 9 月 19 日に、当館は陳春生を雇う予定を発表し、担当者に本人の意思を確認しようと頼まれた記録があった。約 1 週間後に陳春生の返事を貰ったが、1919 年 10 月 27 日に陳春生の職位が決まられて「照相部」に入職した。

1920 年には「製造影片事」の記述があり、陳春生にアメリカの会社と接触させるという業務があった。この情報により、陳春生は当時、映画事業に参加したことを指摘したが、確実に「活動影片部」の成立を示されていない。陳春生に関するメッセージが日記に最後に登場したのは「応酬」欄であった。まとめて言うと、ここでは映画事業の初期発展について詳しく分析したが、当時において「活動影片部」の成立時間をまだはっきり判断できないだろう。

### 第三章 商務印書館の映画事業の発展における陳春生の貢献

#### 第一節 写真部門から活動影片部へ

商務印書館の映画事業は当初本物の映画を撮影するのではなく、『張元濟日記』によれば表 1 で示したように最初は「写真部」であることがわかった。「活動影片部」になるまではどのような過程を辿ったのかを検討したい。そこで、『張元濟日記』に記入された「活動影片」<sup>16</sup>に関する内容を整理し以下表 2 にまとめている。

<sup>16</sup> 映画の別称である。映画の初期の名前と言われる。



表 2

『張元濟日記』	時間	分類	内容
第六本 第 167 頁	二月十二日 星期一 1917/02/12	天頭	昨談各節(中略)五、將本公司製活動影片、(後略)
第六本 第 182 頁	三月十二日 星期一 1917/03/12	紙件/ 文具	鮑君來。言禪臣有第二年印刷機等、擬可購。/ 郭洪生來、談日本有“日本活動寫真會社”、能 製活動影片
第八本 第 233 頁	六月十一日 星期一 1917/06/11	印刷	亞細亞照相公司林祝三來訪、言我處幻燈影 晒、設色稍有欠缺。(後略)
第十本 第 304 頁	十一月十二日 星期一 1917/11/12	編譯	(前略)以通俗教育畫制幻燈、並編講義書(後 略)
第十一本 第 342 頁	一月廿二 星 期二 1918/01/22	公司	(前略)翰在會議室又言、活動影片已費去若干 資本、宜決定如何進行。余意首要得人、次須取 得版權。前郭洪生到日本、曾與日本電影公司 談過。余意擬派人前往考查、一面並與日人商 議合辦之法。(後略)
第十一本 第 349 頁	一月二十九日 星期二 1918/01/29	公司	(前略)一、電燈影片事。議定、先請杜就田到 廠、與郁君等研究再赴日本考察。 <u>目前先就教 育、實業、風景三項酌製</u> 。如成、二、三萬尺、即 可出租與人。余意、能與日本合資、可得人才、 可得版權。同人多不贊成。且俟到日考察後、如 何情形再定。
第十一本 第 350 頁	一月三十日 星期三 1918/01/30	公司	(前略)日本推廣事。(後略)
第十一本 第 367 頁	二月二十五日 正月十五日 星期一 1918/02/25	文具	(前略)杜就田交來、製造影戲片進行條議三 紙。7/2/26 交翰翁。

第十四本 第 457 頁	十月三日 星 期四 1918/10/03	文具	伯俞交來、徐卓呆上推廣活動影片事。已交翰翁。(後略)
第十六本 第 523 頁	元月二十一日 星期二 1919/01/21	文具	演試焚土影片。
第十六本 第 551 頁	三月十五日 星期六 1919/03/15	發信	伯恒、為活動影片事、電促夢回。
第十七本 第 564 頁	四月七日 星 期一 1919/04/07	天頭	(前略)活動影片分館折扣。(後略)
第十七本 第 565 頁	四月十日 星 期四 1919/04/10	發信	沅叔、告知衲鑒棉紙即運、又北山錄舊紙尺寸太小、又四部叢刊目、又影片免稅。
第十七本 第 579 頁	五月六日 星 期二 1919/05/06	天頭	約鮑王諸君、一商發售製造活動影片事。
第十七本 第 580 頁	五月七日 星 期三 1919/05/07	雜記	<u>約鮑慶甲、商議影片進行與外國聯絡、並赴各地試演攝照辦法。又後日赴富春江攝照、又照蚕織各事。種種辦法。並托仙華、伯俞照料。</u>
第十七本 第 585 頁	五月二十二 星期四 1919/05/22	雜記	伯俞來信、勸慶甲再赴杭照蚕織影片。
第二十本 第 677 頁	十一月十八日 星期二 1919/11/18	文具	<u>翰翁交陳春生生活動寫真說明一冊。</u>
第二十本 第 692 頁	十二月十八日 星期四 1919/12/18	應酬	朱兆莘介紹美國遠東影畫公司 J.O.Upham 住舊金山 510Market St. 來見。當招慶甲來陪、導參觀。
第二十本 第 698 頁	元月初二日 星期五 1920/01/02	儀器文 具	<u>製造影片事。余函知陳春生、可與美國某公司接洽。系郭生所介紹。</u>

表2のように、1917年2月12日に「將本公司製活動影片」という記録があり、ここで「活動影片」を始めようとする内容を先行研究では映画事業がすでに始まったと間違えて理解された可能性が高いと考えられる。1917年に映画事業を兼ねて始めようという意思があったが、本気で映画事業に取り組むことは相当難しかった。当時は外来資本の統治時期であったため、本気で民族資本を始めるには様々な問題に直面し、一つ一つを克服して解決しなければならない。

そして、日記の内容から見れば、館は最初に日本の会社と協力するつもりであった。映画撮影に関する機材や技術などは外国の会社から力を借りなければならない。1917年3月17日の日記には当館はドイツの会社から機材を借り、日本の会社に尋ねて撮影に関することを相談した。続いては日本へ視察しに行き、映画の範囲を「教育」、「実業」と「風景」三つのテーマに設定したという。さらに、映画事業を推進するために、何度も日本へ向かった。1919年4月に「活動影片」の正式免許を申請し、当年5月には公的な「知照」を貰った。そして、5月7日には「約鮑慶甲、商議影片進行與外國聯絡、並赴各地試演攝照辦法。又後日赴富春江攝照、又照蚕織各事。種種辦法。並托仙華、伯俞照料。」のように試演と撮影の取材などに走り回っていた。映画事業の起業を順調に進めるために1919年に陳春生を雇って事業の責任者を任命した。そして、「制造影片事。余函知陳春生、可与美国某公司接洽。系郭生所介绍。」のように翌年の1920年陳春生は「活動影片事」のためにアメリカの会社と接触し、事業は大幅に進行した。

まとめて言うと、当館の活動影片事業は発芽期から正式に「商務活動影片部」を成立するまでは、以上のように分析した。先行研究では当館の映画事業の成立時期については意見が分かれているが、本稿では当時の資料を対象として考察した。より明確に館の映画事業のプロセスを再現できた。

## 第二節 陳春生が任彭年を推薦する

第二章で検討した『張元濟日記』における陳春生に関する内容で、陳が商務印書館に入ったとき、「活動影片」の業務が始まったが、具体的な組織はまだ立ち上げていなかった。そして、館の映画事業に関する発展過程については、陳春生が「照片部」に入職してから任彭年と出会って、映画事業における監督の位置を埋めた。筆者の調査により、任彭年については「他性喜戲劇，居常與同人研究皮簧，津津不倦，又曾入精武體育會為會員，對於體育上之練習，頗有心得。」<sup>17</sup>との先行研究がある。陳春生は同郷の任と出会って、任彭年の専門知識と経験を鋭く判断して「活動影片事」に推薦し、自分の助手にした。任彭年は浙江省寧波出身であり、子供の時は英華書館で勉強した。成績は非常に優秀であるが、お金が原因で高校への進学をやめたそうである。16歳から商務印書館に入り、最初は印刷の基礎技術から勉強し始め、その後会計科の幹事に出世した。

陳春生が任彭年を推薦したことは楊小仲(2014)「憶商務印書館電影部」<sup>18</sup>で以下のように指摘されている。

<sup>17</sup> 鄒蘇元 胡菊彬『中国無聲電影史』中國電影出版社、1996年、57頁。

<sup>18</sup> 楊小仲「楊小仲：憶商務印書館電影部」商務印書館館史資料（新三期）2014年。

(前略)その後、小さな長編映画を撮影しようとしたとき、陳春生は博物館の印刷所製本部門の同僚である任彭年に出会った。二人は同郷であり、話し合いが上手くできる。任さんは、印刷所労働者クラブのエンターテインメントグループの確固たる地位を築いている。京劇(北京オペラ)に興味があり、舞台によく出て行ったり、新しい文明劇のリハーサルをしたりすることがよくある。そこで、陳春生は印刷所に任彭年を転勤させて強力な助手になるよう依頼した。

任彭年の才能は陳春生に認められて映画事業に推薦された。任彭年はそれで監督の仕事をはじめた。当時、商務印書館はいわゆる「新劇映画」を撮影した。陳春生シナリオ、任彭年監督のコンビがほとんどで、大量の作品が出てきた。代表作には『清虚夢』、『呆婿祝壽』と『死好賭』などがある。『聊齋誌異』の「勞山道士」を脚色した『清虚夢』(三本)はいわゆる古典小説を脚本として映画に改編する先例である。そして、『清虚夢』では中国で初めての特殊撮影を用いている<sup>19</sup>。滑稽短編の『呆婿祝壽』は民間の笑い話を脚色したもので、ばかな女婿が妻の父の誕生祝いの席で演じる行動を、存分に誇張した作品である。そして、『死好賭』は亜細亜影戲会社の「博徒、死を装う(賭徒装死)」とほぼ同じもので、いずれも滑稽ドタバタ場面の寄せ集めである。要するに、陳春生は任彭年を推薦し、商務の映画事業に大きな役割を果たしたと言える。

### 第三節 中国の映画事業への影響

以下表 3 のように、陳春生シナリオ任彭年監督のコンビでたくさんの作品がある。任彭年は上海出身であり、商務印書館での映画事情で陳春生と一緒に働いていた。彼は商務の「国光電影公司」が倒産してから、1926 年に「東方影片公司」を創立し、同年に映画「工人之妻」を撮影した。そして、1928 年に社名を「月明影片公司」に変更し、武道映画「関東大俠」の 13 話を撮影した、それで中国初代の武道映画監督になった。任彭年と「月明影片公司」は中国初期映画事情の発展史における重要な存在である。とは言え、陳春生の推薦がなければ、任彭年は監督の仕事に触れないかもしれない。いわゆる「千里の馬は常にあれども伯樂は常にはあらず」と言えるのではないだろうか。陳春生や任彭年も中国初期の映画事情では不可欠な存在ではないだろうかと考えられる。

表 3<sup>20</sup>

映画名	長さ	メインクリエイター	上映時間
死好賭	2 本	シナリオ:陳春生、監督:任彭年 撮影:廖恩壽	1919 年
兩難	1 本	シナリオ:陳春生、監督:任彭年 撮影:廖恩壽	1919 年
李大少	2 本	シナリオ:陳春生、監督:任彭年	1920 年

<sup>19</sup> 程季華(主編) 森川和代(編訳)『中国映画史』平凡社出版、1987 年、20 頁。

<sup>20</sup> 喬昭「陳春生の生涯と著作」東アジア文化交渉研究第 14 号 2021 年 3 月、249-264 頁。

		撮影: 廖恩壽	
車中盜	1 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1920 年
猛回頭	1 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1920 年
荒山得金	6 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1920 年
得頭彩	1 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1921 年
呆婿祝壽	3 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1921 年
柴房女	1 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1921 年
愁大捉賊	2 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1921 年
蓮花落	10 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1922 年
拾遺記	2 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1922 年
孝婦羹	1 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1922 年
清須夢	3 本	シナリオ: 陳春生、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1922 年
大義滅親	10 本	シナリオ: 知白子、監督: 任彭年 撮影: 廖恩壽	1924 年
情天劫(原名: 杜鵑血淚 21)	10 本	シナリオ: 董血血 監督: 陳春生、任彭年	1925 年

商務印書館の映画事業は中国初期映画時期の重要な不可欠な存在である。外来資本の主導地位を揺るがし、民族資本の始まりだと言える非常に大事な存在である。また、当館は梅蘭芳の映画処女作を撮影した。それは『天女散花』である。『天女散花』は梅蘭芳自身監督した作品で、その脚本をしたもの

<sup>21</sup> 董血血編「杜鵑血淚」、陳春生と任彭年が監督である。1925年に撮影の途中で名前を「情天劫」に変更した。同注 38、114 頁。

は検討すべきである。戯劇の台本から適応した物であり、その改編には専門の知識が必要となり、まさか当館の陳春生が担当したかと考えている。この点については今後の課題となって引き続き研究したい。

#### おわりに

第一次世界大戦を通じて中国の民族資本はようやく著しい成長を見せ、民族資本による映画製作が試みられるようになる。その口火を切ったのが、教科書や辞書で知られ、現在も中国出版界の重鎮である商務印書館であった。陳春生は商務印書館での仕事時代に当館の映画事業の発展プロセス全体を体験した。本稿は陳春生の経歴に関する情報を取り上げ、考察してきた。商務印書館の映画事業のはじめについて明確に再現できた。そして、先行研究では多くの成立時間に関する疑問を本研究で解決し、映画の発展に関する明確なタイムラインを明らかにした。中国初期の映画事業における商務時期は映画の発展史に不可欠な存在である。その発芽期から正式に成立するまでの発展は映画分野に有益な模倣を与えた。民族資本の成長は中国の文化発展の歴史上にも貴重な印のようなもの存在ではないだろうか。本稿の研究を通して、清末民初における文化交流の産物として、外国資本から抜かれ、本格的な民族資本を萌えた商務映画事業のプロセスを再現した。